28PA-pm065

肌トラブルに対する紫外線およびアレルギー素因の影響

〇櫻井 美貴子[1], 高石 雅樹[1], 浅野 哲[1]（[1]国際医福大）

【目的】近年、オゾン層破壊による紫外線量増加等により、日光照射に起因する皮膚疾患、特に光線過敏症の罹患者が増加している。そこで本研究では、紫外線暴露による肌トラブル・皮膚疾患について、アレルギー性疾患の併発、各個人が持つ体質との関連性を解析し、適切な対策や予防法を検討した。

【方法】肌トラブル及び紫外線に対する意識が高いと予想される 10 代~20 代の学生が在学する本学の薬学部学生に対してアンケート調査を行い、実際に若年層の光線過敏症の罹患率や各個人が持つアレルギー性疾患等の併発率、体質又は紫外線への関心などを解析し、対策を考察した。

【結果】光線過敏症罹患者の割合は，全体の 7.6%であった。男女別では，男性全体の 2.2%、女性全体の 9.6%と、女性で罹患率が高かった。光線過敏症罹患者のうち 53.9%が長時間の日光浴が原因で光線過敏症を発症した。光線過敏症罹患者では、日焼けをした際に容易に赤くなるが黒くならない色白肌（スキンタイプⅠ）に分類される割合が，非罹患者の 2 倍以上であった。また、光線過敏症罹患者では、アトピー性皮膚炎を併発している割合が，肌トラブルのない学生の約 9.5 倍であった。

【考察】本学学生の調査から、光線過敏症罹患者では、日焼けをした際のスキンタイプが色白肌の割合が高く、アトピー性皮膚炎の併発頻度が、非罹患者と比較して多いことから、紫外線への感受性，すなわちスキンタイプやアレルギー体質といった素因が、光線過敏症発症のリスク要因となる可能性が高いと考えられた。以上のことから、光線過敏症をはじめとする紫外線曝露による肌トラブルを予防するためには、適切な紫外線対策を行うことが有効であると考えられた。